

古記録にみえる

なが さき かい どう やま え しゆく めい しょう
長崎街道・山家宿の名勝(1)おこなべ こなべ
□大鍋・小鍋

JR筑前山家駅前から国道200号線を北に進むと、福岡県道路公社山家電気室が道の左側にあり、更に130mほど進むと山家川と交差します。その川底部分が大鍋・小鍋といわれ、その峠は鍋峠と呼ばれています。

大鍋・小鍋について、『筑前国続風土記』には次のように書かれています。

「川の底に長三十間餘の大岩有て、その岩上を水流る。岩の両方は土にうづもれて見えず。横三・四間許は現れ見ゆ。其三十間許の間、水流る、所くぼく、其間深き所五・六箇所あり。中につみて最下に瀑あり。淵あり。是を大鍋と云。甚深し。其上に小鍋として恰鍋の口のごとく、人力にてうがてるごとくなる深淵あり。徑一間あり。其深き事、昔ははかり難しと云。今は繩に石を結付、さげて見るに、八尺許あり。水の色黒くして底見えず。其上に段々深き所あり。此岩の上を水流る、によりてことなる見所也」。また、奥村



▲大鍋・小鍋

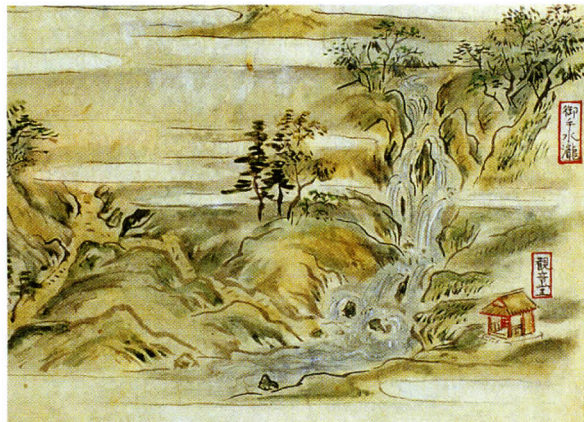
(『筑前国続風土記附録』より)

玉蘭の『筑前名所絵図』にも、名勝として同じような記事が記載されています。大鍋・小鍋は山家川の本流で、ここは川底の岩の柔らかい部分が永い年月のうちに次第に浸食され、深い凹みとなった深淵で、上流にあるのを小鍋、下流にあるのを大鍋と言っています。長崎街道は、この大鍋・小鍋の真上を通っていました。街道を通る人は、この景観を見て旅情を慰められた事と思います。終戦の頃までは幽玄の雰囲気漂わせていましたが、現在では、大鍋の上を国道200号線が通り、少し川下に砂防堤ができ、深淵にも石が流れ込み、また兩岸も竹林が繁り、趣が変わってしまいました。昔の景観を取り戻したいものです。

なお、「続風土記」では、大鍋は下流にあるように記されていますが、「附録」の挿絵では、上流に描かれています。



▲今もわずかに残る「大鍋」

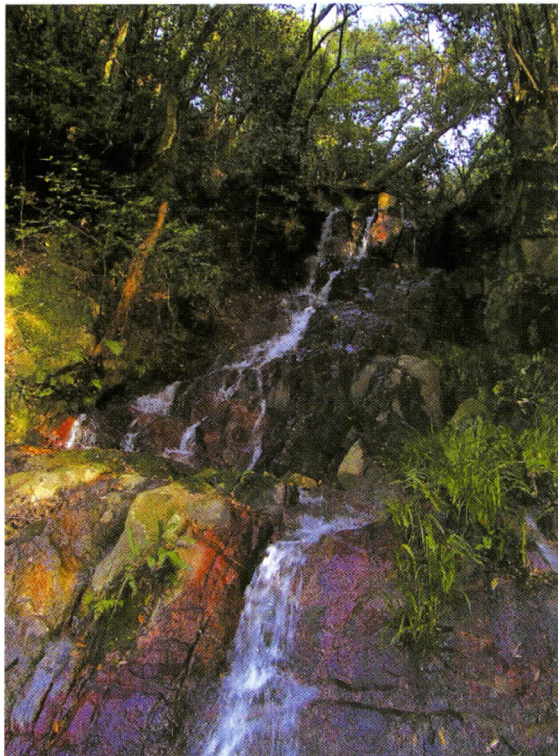


▲御手水の滝
（『筑前国続風土記附録』より）

□御手水の滝・弓石

御手水の滝は、JR筑前山家駅から国道200号線を北に進み、山家川に架かる浦の下橋を渡ってすぐに右折し、山道を東へ約700m進んだところにあります。険しい岩を伝って流れるこの滝のことは、江戸時代中期の地誌『筑前国続風土記』にも「御手水瀑布」として、次のように記されています。

「山家村より十五町許東、池田と云所にあり。大道の東にあり。小流也。岩を傳ひて下る。上の段高さ七間許あり。三條にわかれ流る。下に二間許の瀑有て、其下に又五尺許の瀑あり。然れども並に佳観には非ず。瀑の前に観音堂あり。此のたきは山家川の本流に非ず。側の



▲御手水の滝

小谷より出る水也。」

終戦直後まで、滝の傍に観音様がいましたが現在は、4体の石佛が残るのみです。「御手水の滝」のいわれは、神功皇后が、石の上に弓を置き、この滝で御手水をつかわれたことに由来するとの伝承があります。また、弓を置かれた石には弓の形が残ったので「弓石」と言う伝承があります。『筑前国続風土記附録』に「駅の北二十五町餘に弓石とて高八尺餘、横一丈餘の岩あり。」と書かれていますが、現在では見ることはできません。

（水城泰年）

※『筑前国続風土記附録』の写真は、福岡県立図書館の所蔵である。



▲観音堂の跡にまつられた石仏